

# 成果報告書

記入日 2021年 4月 18日

フリガナ：(ワタナベ ヒロキ ) 氏 名：渡邊 大樹	渡航先国名 ベトナム	留学先の所属機関：ホーチミン市人文社会科学大学 帰国後の所属機関：岡山大学
研究テーマ：国際認証制度と慣習経済との相互作用－ベトナム南部のエビ養殖を事例に－		
研究期間：2019年 4月～2021年 3月(2年 0ヶ月)		
<p>研究成果（概要）</p> <p>エビの流通の川上部門を構成する生産者や仲買人，そして卸売業者との関係性を理解することができた。これにより，どのような価値観に基づいて各主体は取引相手を選択することが明らかになり，国際資源管理認証と慣習経済との相互作用を検討することができた。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p><b>【研究背景】</b></p> <p>近年、途上国の農村地域では、国際 NGO や地元政府、そして小売業者の協働による『国際資源管理認証』の導入の動きが盛んである。国際資源管理認証とは、エコラベルの貼付された農林水産物の生産、流通及び消費を通じて、生産現場の自然環境の保全を構想するボランティア且つグローバルな制度である。強制力のある法等とは異なり、任意という性質を有するため、制度の成立には、サプライチェーン上の各アクターの主体的な参加が欠かせない。しかしながら、グローバルな枠組みであるがゆえに、ローカルな社会的慣習に基づき意思決定を行う生産現場のアクターのニーズと制度との間で、不整合がしばしば生じている。</p> <p><b>【研究目的】</b></p> <p>そこで、本研究は、ベトナム南部のマングローブ林地域におけるエビ養殖に対する国際資源管理認証の導入を事例に、認証制度の普及に必要な要素を、生産現場のアクターの視点から考察していく。そのために、以下 2 点の研究目的を設定した。まず、現場の慣習経済の構造を明らかにする(研究目的①)。エビ養殖の流通の川上を形成する生産現場のローカル・アクター(生産者、仲買人、卸売業者)間における既存の取引関係が、どのような社会的慣習及び合理性に依拠して構築されているのかを検討する。その上で、<u>国際認証制度と慣習経済との相互作用を明らかにする(研究目的②)</u>。したがって、どのような条件下で、ローカル・アクターの社会的慣習に基づく合理的な意思決定が、制度への参加、もしくは制度に対する忌避や抵抗に繋がるのかを検討する。</p> <p>国際認証制度の実施が現場に与える影響を、現場の視点から検討した研究は非常に少ない。本研究が遂行された暁には、より現場主義的な認証制度への改善に貢献できることが期待され、その点において社会的に意義がある。</p> <p><b>【調査概要】</b></p> <p>本研究の対象地域は、ベトナムの最南端に位置するカマウ省ゴックヒエン県ビエンアンドン村(以降 VAD 村)である。VAD 村の主な産業は、エビ養殖と林業である。村の面積は 12,663ha で、そのうち 5,739ha が森林である。現地では広大なマングローブが生育し、国の森林地域に指定されている。そのため、地元住民はマングローブ保全の義務を負い、養殖池の中にマングローブを保全しながら粗放的にエビ養殖を行う。</p>		

粗放的養殖とは、たとえば、池の中の水質を浄化するために薬品や機械を使用するのではなく、マングローブ生態系を活かしたり、潮の満ち引きを利用して水を入れ替えたりする。また、エビを養殖するために飼料を投入する必要はなく、汽水に含まれるプランクトンやマングローブの葉が飼料代わりとなる。VAD 村では、2013 年から国際資源管理認証の普及を目的とした国際事業が、NGO やカマウ農業農村開発省、そして、国内で大手の水産商社 A(これらの主体を導入側のアクターとする)による協働によって取り組まれている。

研究目的を達成するために、本研究では導入側のアクターとローカル・アクターに半構造型インタビューを実施した。質問内容として、まず、導入側のアクターには、制度導入の背景や目的、制度設計、役割、導入の成果や課題について聞き取りを行った。一方で、生産者には認証への参加状況や取引相手との関係について、仲買人には取引している生産者の人数や取引を維持するための戦略について聞き取りを行った。

## 【調査結果】

### 1. 導入側から見た国際資源管理認証

#### (1) 導入の目的

VAD 村では、2013 年よりドイツ政府の援助の下で、国際自然保護連合(IUCN)とオランダに本部を置く国際 NGO である SNV が、地元政府や水産商社と協働しながら、認証の導入に取り組み始めた。制度導入の目的は、主に 2 つあった。1 つ目は、森林の保全及び造林である。現地で導入されている認証には、たとえば、養殖池の面積の 50%以上をマングローブとして整備することを要求する環境基準が設けられている。2 つ目は、認証プレミアムによる生産者の所得向上である。認証プレミアムとは、生産者の環境配慮への努力に対する支払いであり、通常の商品価格に上乗せされたものである。国際 NGO は、認証をツールとして環境分野と経済分野の課題に取り組もうとした。一方で、水産商社 A は、とくに環境意識の高い EU やアメリカへの輸出には認証の取得が必須であることに加えて、エコラベルが貼付されたエビのほうが取引価格が高いことを理由に参加していた。

#### (2) 普及に向けた戦略

VAD 村で生産されるエビは、流通の川上部門を構成する生産者と仲買人、そして卸売業者から、川下の水産商社へと流通する。村内には仲買人が少なくとも 100 人以上おり、また卸売業者は 7 か所ある。導入側のアクターは、この既存の流通を利用して認証用の流通を構築しようとした。つまり、生産者と仲買人、そして卸売業者に認証を取得させ、経済的インセンティブ(認証プレミアムや割増金)を与えることで水産商社 A との取引を促進しようとしたのである。ただし、認証を取得したからといって、流通の川上の各主体が水産商社 A と取引する義務はなく、取引相手の選択は自由である。そのため、実際には価格次第で認証として取引可能なエビは非認証エビとして競合する他社に流れてしまった。そこで、2018 年から村内に水産商社 A 独自の卸売会社を設立し、地元の卸売業者を介さず、仲買人と直接取引してより多くのエビを確実に購入できるように試みた。

なお、認証取得者数は、生産者が 544 人、仲買人が 89 人であった(2021 年 3 月調査時点)。

### 2. ローカル・アクターから見た国際資源管理認証

#### (1) 認証基準を満たすための生産者の取り組み

聞き取りを行った生産者 18 人のうち 14 人は、従来の養殖方法がそのまま認証された。残る 4 人は、認証を取得するために、魚を殺すための薬の使用中止や 1ha の植林、そして家畜の飼育中止等を行った。多くの生産者が養殖方法を変更することなく認証基準を満たしていた。このことは、現地で生産されるエビは、潜在的に「エコラベルの貼付されたエビ」であったことを意味する。

#### (2) 既存の流通の川上が制度導入に与える影響

2018 年から VAD 村に独自の卸売会社を設立した水産商社 A であったが、実際の流通はどうだったのだろうか。認証を取得した生産者の 16 人の販売経路には、3 つのパターンがあった。ただし、2 人は無回答である。まず、3 人は水産商社 A の卸売業者と直接取引をしていた。次に、6 人は仲買人を介して水産商社 A の卸売業者と取引していた。そして、7 人は仲買人を介して別の卸売業者と取引していた。このことから、

認証として取引可能なエビは依然として非認証エビとして流通していたことが分かる。さらに、水産商社 A の卸売業者と直接取引するようになった 3 人の生産者以外は、認証取得前後で取引相手に変更は見られず、従来から取引している仲買人と取引を続けていた。このことは、川上を構成するローカル・アクター関係には頑健性があることを意味する。流通の川上が認証の導入の成否を規定していた。

### (3) 流通の川上の構造

生産者 18 人のうち 14 人は基本的に同じ人と取引を継続していた。残りの 4 人も基本的に同じ人と取引を続けるが、収穫量や価格によってときどき他の人と取引することもあった。このことから、生産者は継続的に 1 人の取引相手と取引する傾向にあると判断できる。

生産者はなぜ同じ仲買人と取引を継続するのか。その理由を取引期間と生産者による取引相手の選択基準から検討した。生産者と仲買人との取引期間は、最短で半年間、最長で 25 年間であった。取引期間別に生産者の取引基準を検討したところ、取引期間が 3 年以下の生産者は、取引相手を選択するうえで「価格」が主な選択基準となっていた。たとえば、取引相手を水産商社 A の卸売業者に切り替えた 3 人の生産者の選択基準は、価格に加えて認証プレミアムであった。一方で、取引期間が 4 年以上の生産者は、「価格」はもちろんのこと、「仲買人が親戚や兄弟」、「約束した日にしっかりお金を払ってくれる」、「エビを正確に計量してくれる」、「資金援助をしてくれる」、「親切である」等が選択基準であった。このことは、流通の川上の構築には経済的要因のみならず社会的要因が影響していることを示唆する。また、取引相手との取引期間が長いほど、生産者にとって取引相手が信頼できるかどうか重要な選択基準となっていた。VAD 村で認証を推進させるための重要な要素として、水産商社 A は生産者からの信頼を得るための努力が必要であると考えられる。

一方で、聞き取りを行った 5 人の仲買人のうち 3 人は、従来取引していた地元の卸売業者から水産商社 A の卸売業者へと取引相手を変更していた。その理由は、取引価格が高いことや割増金がもらえること、そして水産商社 A は大手であるため安心して取引できることにあった。このことは、仲買人はより経済的に行動することを示唆する。

### 【考察及び結論】

国際資源管理認証の導入が流通の川上を構成するローカル・アクター間の関係性に与える影響は、ほとんどなかった。つまり、慣習経済が変わることはなかった。しかし、仲買人は影響を受けていた。生産者と比較して、仲買人はより経済的に行動していた。したがって、認証用の流通経路は、生産者と仲買人によって構成される慣習経済と、仲買人と卸売業者 A によって構成される市場経済によって構築されていたのである。そのとき、仲買人は慣習経済と市場経済との橋渡し役として機能していた。

国際資源管理認証の取り組みは、現地の生産方法や取引慣行を変える傾向にあり、地元住民にとって大きな負担やコストになりやすい。しかしながら、本研究の事例では、国際資源管理認証が現地の生産方法や取引慣行が変えることなく、そのまま包含していた。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

今回は2度目のベトナム留学でした。今回は2016年4月から1年間留学しました。あれから2年後に再びベトナムに戻ってくることができました。タンソンニャット国際空港に到着後、「Panasonic」の文字が記載された大きな看板を見て、「こうして留学できるのは松下幸之助記念志財団からご支援を頂けるからこそなのだ」と肅然とした気持ちになりました。

前回よりも自動車の交通量が増えていたり、道路が拡張していたり、新しい高層ビルが建ち並んでいたりなど、ホーチミン市は急速な発展を遂げていました。私の調査地域であるカマウ省もカマウ市には大きな商業施設が開業していたり、村へ繋がる道路が整備されていたりなど変化を感じました。ただ、村の中では相変わらずボートが主な移動手段となっているため、調査中にボートを使わないときは、まるでジャングルのような道なき道を草木をかき分けながら歩きました。一方で、前回の留学でお世話になった村の人々は、私のことを忘れずに覚えてくださいました。とくに、食堂のご家族には、私を家族のように慕ってくださいました。調査中はその食堂でのご飯が毎日の楽しみであり、活動のためのエネルギー源でした。村人の方々の温かな歓迎があったおかげで、私は現地で柔軟に調査を行うことができました。現地の方々には感謝しております。

ところで、ベトナムでは次のような質問をよく受けました。「なんでアメリカやヨーロッパじゃなくてベトナムに留学しているの？」や「なんで英語じゃなくてベトナム語を勉強しているの？」と。私もベトナムに留学する前の学部生の頃は、なんとなくですが欧米に憧れていました。しかし、ベトナムで留学を始めてたくさんの学びや気づきがありました。それらは研究に限ったことではありません。現地の人たちの暮らしや文化を身をもって体験することで、人々の気前の良さであったり、明るさであったり、優しさを感じ取りました。一見すると、研究とは関係ないかもしれませんが、このような日常的な経験が「慣習経済」を理解するうえで大いに役立ちました。

ベトナムの人たちとは「幸福」とは何かについてよく語り合ったものです。

## 今後の社会貢献

この留学は、松下幸之助記念志財団からご支援とご声援を賜り実現できました。2020年の年明けから新型コロナウイルスの世界的な流行を受け、留学2年目はいろいろと大変でしたが、無事に留学を終えることができました。財団関係者の皆様には大変感謝しております。

今後、私が社会に貢献できることとして、まず今回の留学で得た情報をもとに論文の執筆に取り組みます。論文の投稿を通して、自身の研究で得られた知見を他の研究者や国際開発関係者と共有します。また、現地でお世話になった地元政府、国際NGO、商社及び地元住民に調査結果を報告し、現場の課題解決に役立ちたいです。また、地元の高校に出前授業を実施し、ベトナムと日本の関係について発表したり、フィールドでの経験を発表したりしたいです。

そして、将来にわたって、地域研究者として現地が必要とする持続可能な開発の実現に貢献できるように頑張りたいです。そのために、住民やコミュニティとの対話を通して汲み取った現地のニーズを開発プロセスに反映させる役割を果たしていきたいです。



写真1. 調査中, 毎日の活力となった食堂のご飯



写真2. 食堂のご家族



写真3. マングローブ湿地帯(VAD村)